敬老特集

おじいちゃん　おばあちゃん　ながいきしてね

多年にわたって社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝うため敬老の日がもうけられました。

本町でも毎年敬老会が開かれています。

今回、ちょうど敬老の月にあたりますので、老人クラブのみなさんから原稿を本紙に寄せていただきました。

菊で結ばれた友情

宮内老人クラブ　鈴木　宗次郎

老人クラブ連合会長　実川　勉

老人クラブ連合会は、昭和三十九年九月結成され二十九の単位クラブと千六百人の会員を有し、会長はじめ副会長三名、理事十三名が会の運営にあたっています。

単位クラブの育成強化を図り、福祉の増進に寄与するための老人クラブ連合会もようやく軌道に乗りました。

組織的にも充実し、活動も活発になり一例ではありますが菊花盆栽陳列、地域社会との交流、研修、見学及講演、その他観光旅行等があります。

私達老人は、健康に留意しながいきし、出来得る限り家のため町のために努力したいと思っています。

町民のみなさま、微力なる私共のために絶大なるご指導とご援助の程をお願いいたします。

宮内老人クラブの鈴木不求氏の作に〝菊咲いて花一徹を失いり〟という名句があります。

とかく我々老人は、若いころ箱詰の教育を受け尚軍隊で固められたため、頑固一徹の人間になってしまった。

現在のように月旅行の出来得る時代とは、余りにもかけ離れた存在になってしまいました。

若い者から見ると、一層頑固のかたまりに見えると思います。

そこで、これを解きほぐすのはまず菊作りである。

目を細めて菊の世話をしている時は、家族から見てもいい円満なおじいさんに見えると思う。まさに、一徹を失った姿である。

私は町合併当時、合併委員であったが一番心配していた点は、地域的な統合より人の統合であった。

特に老人は、若い者と違って社会的にも会合や交際も、皆無になっているので難しい問題だと思っていた。

老ク連合会の向後君が五年前にまいた種が見事に発育し今では、八十有余名の菊花会員が出来ました。

町当局の暖かいかさのした〝花いっぱい明るい町を〟のスローガンで楽しくがんばっています。

趣味を同じくした各地区の老人が一体となって、菊作りに専念すると心と心の結び合いで、俺達の町と言うありがたい観念がわいてきます。

最後にひとつおすすめしたいのは詩吟である。

声を精いっぱい出す事は、一番の健康法で漢詩を研究することは最高の修養である。

朝に菊を作り、夕べに詩を吟ずることは、最良の趣味だと思います。

みごとに咲いた菊

老翁心

長塚老人クラブ　吉田　潤一郎

老婆心と言う言葉は、昔からずいぶん聞かされていますが、老翁心とは、余り聞かないと思います。

どちらにしても、五十歩、百歩の心と思われます。

過言かもしれませんが、今世間を二分にして胎動を始たものに、九十九里海岸問題がありますが。

観光地にすべきだ、いや工場地帯にすべきだ。

いずれにしても、具体的な説明はまだ得られないので我々の知る由もない。

老翁心ながら一言申しあげるならば、観光地もよし工場たことのみが先にたち、いわゆる新しい仕入れをしないでストック品を持ち出してくるので、若い人たちに受け入れられなくなる。

言いかえれば、老人の経験のみの押し売りは、子や孫たちにまできらわれついには孤立してしまいます。

経済的にもめぐまれいかに健康であっても、淋しい生活をしているものも少なくない金のあるために苦しみ、親子関係が悪いために毎日おもしろくない生活をするほどつまらないものはない。

朝夕笑い声のたえない家庭は幸福に満ちあふれている。

戦後の生活様式の変化と思想の自由によって、家族制度の崩壊を生じた老人ちは、おなり無条件降伏で敵国の占領下で日本国は、千年の歴史を巻きおさめました。

あらゆる点で全く日本は一転して、自由とかの思想が流れ込んで来て個人〝が勝手気ままの振舞を行い、医薬食料をいたるまで極度の不足を来たしました。

六十才以上の老人等は、ごくつぶしであるから早く死んだ方がよい、何にも医薬を与える必要はないとのこと、私達は、無医薬ごくつぶしの中間であった。

昭和二十九年五月三日には町制が施かれ、光町が誕生し世界の文化経済思想方面もしんけんに考えられ始めた。

男女、夫妻、姑嫁等の座が大きくゆれ出してその位置が一変したかの感がありました。

私達は、いつしか七十才前後の老人となってしまいました。

政府及識者は、高度成長の産業経済文化と共に思想面にも思いをいたし、老人福祉法を制定し毎年九月十五日を老人の日と定めました。

町長さん始め町ぐるみあげて敬老の日の行事に万善をつくされることは、我々老人としては全く感謝の他はありません。

我々老人としては、この御好意に対しお互いに十二分の感謝をすると共に自ら反省してめまぐるしくうつり変る世代に、老骨にむち打って老人なりに勉強を忘れず、好意に応える責任を通感する覚悟を新たにしましょう。

戦争は、我に利あらず。結果は、我国未曾有の大敗戦となり無条件降伏で敵国の占領下で日本国は、千年の歴史を巻きおさめました。

あらゆる点で全く日本は一転して、自由とかの思想が流れ込んで来て個人〝が勝手気ままの振舞を行い、医薬食料をいたるまで極度の不足を来たしました。

六十才以上の老人等は、ごくつぶしであるから早く死んだ方がよい、何にも医薬を与える必要はないとのこと、私達は、無医薬ごくつぶしの中間であった。

昭和二十九年五月三日には町制が施かれ、光町が誕生し世界の文化経済思想方面もしんけんに考えられ始めた。

男女、夫妻、姑嫁等の座が大きくゆれ出してその位置が一変したかの感がありました。

私達は、いつしか七十才前後の老人となってしまいました。

政府及識者は、高度成長の産業経済文化と共に思想面にも思いをいたし、老人福祉法を制定し毎年九月十五日を老人の日と定めました。

町長さん始め町ぐるみあげて敬老の日の行事に万善をつくされることは、我々老人としては全く感謝の他はありません。

我々老人としては、この御好意に対しお互いに十二分の感謝をすると共に自ら反省してめまぐるしくうつり変る世代に、老骨にむち打って老人なりに勉強を忘れず、好意に応える責任を通感する覚悟を新たにしましょう。

共に持ちつ持たれつあらゆる方面より設備の改善施設の拡充等々期して待つべきものがあると思われます。

声を大にして叫びたい、君子国子は、子孫のため美田を買はずと申しましたが、賢明なる施政者町民の皆さん子孫のため、百年の計を立てるのは今ではないでしょうか。

後日、必ずやこの問題に対しアンケートを募集することもあると信じ、我々も今日よりそれに対応する心構へを貯えて置くべきではなかろうか。

ちょっと思い出したので、筆を取ってみました。

これは、老翁心ではなくほんとうの老婆心だとお笑いください。

貴重な時間をいただき、ありがとうございました。

感謝と反省

小川台老人クラブ　大津　頼順

私は、明治二十年台に生まれた者です。

私と同じ年代に生を及けた人達は、沢山ご存命でおられると思います。

私の世代ほど、破乱の多い世代は、我国としては稀世の感があります。

ある意味では、しあわせの世代に生まれて来たと思います。

人間だれもが、この目で見たり、この耳で聞いたり、この口で味ったり、この体で触れたり、所謂体験する程、とうとい貴重なものはありません。

まず子供時代の明治二十七、八年には、日清戦争あり三十七、八年には、日露と両度の戦争に打ち勝ったと言うので、世界中の目が日本に向けられました。

このころはいくらか、もの心ついた十才前後です。

ところが、日本と言う国が世界地図ではちょっと見付からなかったのでした。そこで、拡大鏡を持ち出してやっと見つけたくらいです。

日本政府も自分の国が、地図に見つけやすいように真赤に色取ったのです。

ちょうど日光唐辛子をなぜにしたような島国です。

この日光唐辛子が、世界中をビリリとさせたのです。

海外に名をあげた明治は、大正と改元され大正十一年には東京上野に万国博覧会があった。ゆく十二年九月一日には、関東大震災あり幾万の精霊と莫大の財産が一瞬にして失滅した。このころは、三十才台の青年で、自分ながら大活躍をしたことを覚えている。

大正は、早くも昭和と改元されその三年には、華々しい御大典の大儀式があげられた。震災のきづあともたちまち、復興して日本は、みずから大日本と豪語するにいたった。

ヨーロッパに端を発した第一次世界大戦争に参加して、刃に血ぬらさず戦勝国となり南洋諸島の統治を委任されたので、地域的にも全く大日本となりました。

世界せいはの野望を起して第二次世界戦争を引きおこした。

この頃私達は、五十台の人生では真盛りの実りの秋とも言うべき年令でした。

年寄りも勉強を

作間内老人クラブ　向後　清重

人間は、だれでも年寄りになれば、目はかすみ、耳も遠くなり、足腰もきかなく、社会を見る目もうとくなり生活のチエも退化してくる。

こうなると、むかし経験し

日吉奮戦およばず

東陽A二回目の優勝

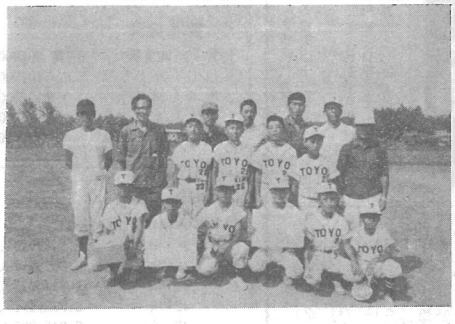
八月四日、五日の両日第二回町内少年野球大会が、光中と東小で行われました。

日吉ニチーム、南条一チーム、東陽六チーム、白浜二チーム計十一チームが参加しました。

去年は、中学生も出場しましたが、こんどは小学生だけのリトルチームでした。

東陽Aチームと日吉Aチームの決勝戦は、熱戦の末五対三で東陽Aチームが優勝しました。

連日のうだるような暑さをはね返すように、チビッ子たちの好プレイが続出しました。



熱戦のすえ優勝した東陽Aチーム

8月26日旭市営球場で海匝支区少年野球大会が行われました。
東陽Aチームは、おしくも準優勝でした。

編集後記

暑さもようやく峠をこし、秋の訪れ近しのこの頃です。

きれいな海水と広い砂浜をほこる木戸海岸は、連日のにぎわいを見せました。

暑いと、汗が多くでて体内のエネルギーが相当量失われるので、季節の変わりめは、とかくつかれが出がちです。

さわやかな秋風とともに、読書、勉学、スポーツに最適な季節がやってまいります。

季節の変わりめにそなえ、栄養がゆたかに含まれているものを多くとり、明日へのファイトを養いましょう。

婦人会の料理講習会

8月1日、南条公民館で婦人会の料理講習会が開かれました。当日は、農休日でしたので南条地区の会員のみなさんが参加しました。腕によりをかけて出来あがったものは、色どりもあざやかなお寿司でした。

橋場青年館で開かれた芸術展